発行者　教育推進支援センター FD・AL 部門

第44号　Faculty Development

広報FDだより　2025年3月17日発行

実施報告

第21回　室蘭工業大学FDワークショップ（2024）報告

FD・AL部門　一同

2024年９月５日（木）に，本学教育・研究３号館にて開催した。今回のワークショップは午前に成績評価に関するグループワーク（GW）を行い，午後は「工大生を鍛えるには」というテーマについてGWを実施した。受講者は東京都市大学から参加された１名を含めた19名であった。始めに学長に開会の挨拶をして頂いた。続いて日程の説明を行い，アイスブレーキングへと進んだ。

１．アイスブレーキング「漢字１文字自己紹介」

ワークショップの導入部として，和やかな雰囲気でグループワークの土台となるチームワークを醸成することを目的として行われた。自分を表現する漢字（氏名に含まれない漢字）を１文字選び，付箋紙に記入し，各人がいずれの文字を記したかわからないようにタスクフォースが回収し提示する。ついでその文字を入れずに順に自己紹介し，他のメンバーはいずれの文字が誰に該当するかを推理する。ユーモアを交えて様々なエピソードを披露してグループメンバーとの距離が縮まり，活発に意見交換やグループ作業を進めることができるようになった。

２．グループワーク１「成績評価の課題を考える」

このGWは３ステップで進行させた。最初に受講者を対象に事前に行ったアンケートの結果を交えて，本学の新任教員の方々が共通で抱えそうな疑問点に答えるガイダンスを行った。次にGWで議論をしていただき，最後に議論の内容を発表していただいた。

２．１　ガイダンス

事前アンケートはワークショップ受講者全員へ回答を依頼し，７名から回答があった。１つ目の質問ではFD用語の理解度を訊いた。説明できそうにない項目は，FD，AL，ルーブリック，リメディアル教育，反転授業であった。これらは，２つ目の質問で訊いた詳しく知りたい用語と一致していた。３つ目の質問は本学の“しくみ”に関して正しい対応を選択肢から選んでもらった。迷いが見られたのは，公欠の扱いの規則，オンライン授業が認められる条件，休学願や退学願の手続き方法であった。以上を踏まえて，FDの基本情報の提供，本学におけるFD活動の説明，本学における学生指導に関する手続きなどの説明を行った。

２．２　グループ討論

GWは成績評価の課題に限定して議論してもらった。各グループの発表内容を紹介する。

２．２．１　グループA「成績評価の課題を考える」

成績評価の際，試験と課題をどのような比率で組み合わせるかについての発表があった。定期試験100%の評価から，定期試験50%＋課題50%まで６通りの組み合わせの評価方法が紹介された。教育学の観点からは多面的評価が良いとされているが，様々な評価方法で学生を評価することにより，大学全体としてみれば多面的に学生を評価できるのではないか，また，評価基準が各先生により異なっていても，シラバスなどに明示されていれば自信を持って評価して良いのではとの提案があった。

２．２．２　グループB「不合格ラインの59点の扱いをどうするか?!」

グループ員に共通していた方針は「学生に不利益になることはしたくない」であった。これまで実際に取り組んできたこととして，試験には正答が一つの問題だけでなく，点数を調整できる問題を入れる，普段の出席やレポート提出状況も成績に加味する，レポートなどの評価を口頭諮問で行う，などの工夫が紹介され

た。さらに，解答に生成AIを用いた可能性がある場合の扱いが議論になった。

２．２．３　グループＣ「あなたはこの学生を可にする不可にする？」

可と不可のいずれに判定すべきかが曖昧な境界にいる学生をどう評価するかが問題となった。これに対して，成績評価の方針（例えば知識ｘ％，スキルｙ％）を明確に示す，ルーブリックのような達成度の評価基準を設定するなど，基準を明示することが有効とされた。また一般的に出席点を与えることは認められないが，授業の終わり頃に小テストを実施して成績に含めることはできるとの提案があった。

２．２．４　グループＤ「再試験する？しない？」

再試験を実施するか否かの対応は，教員によって異なっていたので，その理由について議論した。再試験を行わない理由は，再試で最終的には救済されると期待して本試験では気を抜くようなことなく最初から集中して勉強して欲しいこと，複数教員で担当する授業では再試験の設定が難しいことなどである。再試験を実施する理由としては，再履修する学生の負担は高いため単位を取得できるように配慮すべき，再履修生が増えて教室の収容人数を超えてしまうことを回避したい，特に教養科目については速やかに単位を取得し，専門科目の学習へ進んで欲しいという要望が寄せられた。

２．２．５　全体討論

全グループの報告後に行った全体討論では，「学生同士に自分を含めた評価を行わせる」，「再試のための費用を徴収する」，「再試をしないかわりに，50点以上の学生だけは救済レポートを受け付ける」など様々な意見が出された。成績評価は参加者の誰にとっても非常に関心が高いトピックであったようで活発な議論が続き，時間終了が惜しまれた。あらためて成績評価は教員にとって悩ましい課題であることが確認された。

３．グループワーク２「室工大生の修学リテラシで“気になる点”を話し合う」

午後の部は「工大生を鍛えるには」というテーマで，GW2で討論，GW3でプレゼンの２部構成で実施された。

３．１　タスクフォース（TF）による説明

GW2では，室工大生の修学リテラシで気になる点をグループ毎に話し合ってもらうことにした。大学における修学リテラシとは，「普段の講義を受講し，単位を修得するために必要な基礎的能力」のことを指し，具体的には，「聞く力」，「読む力（読解力）」，「書く力（作文力）」などが挙げられる。ここで，TFから話題提供として，室工大生の読解力についての調査結果が紹介された。

図１に示す問題は，新井紀子著「AI vs. 教科書が読めない子どもたち」（東洋経済新聞社，2018）の中に出てくるRST（リーディングスキルテスト）の例題である。上記著書によれば，この問題の中学生，高校生の正答率がそれぞれ38，65%であり，中学生の正答率の低さに驚かされるが，室工大生の正答率は80%（324名中260名が正解）であった。少なくとも，高校生よりは基礎的読解力があることが分かり，参加者の皆さんも一安心されていたようであった。

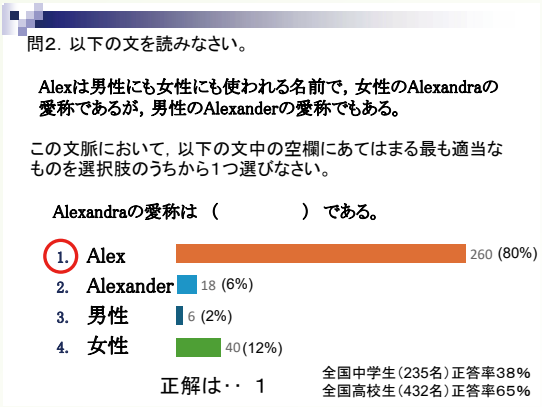

図１　室工大生の読解力は‥

３．２　グループ討論

TFによる作業内容の説明の後，各グループに分かれてグループ討論が行われた。先ず，テキストのワークシートに，講義をしていて気になる点，室工大生に欠けていると思われる修学リテラシなど各個人の意見，体験談などを記入してもらった。次に，記入されたワークシートをもとに，グループ内で議論し，GW3で取り上げる重要課題を決める作業を実施した。

４．グループワーク３「“重要課題”の克服を目的とした“新しい授業”を考える」

GW3では，GW2で議論した内容を基に，本学で開講する新しい授業の案を練り，発表して頂いた。アイデアを発表順に紹介する。

４．１　グループＤ「書く力の涵養」

工大生の修学リテラシで心配なのはInputよりもOutputのスキルである。特に書く能力は，学生の個人差が大きいようだ。及第点の文章を書けない理由は，読み手の立場になって作文できていないからであろうと分析した。そこで，文章力の向上に先立って必要と考えられる様々な立場の人とのコミュニケーション力を磨く，『多様な相手の心に響く表現演習（たひょー演習）』を開講する。１年前期に開講し，到達目標に１）多様な相手に対する理解度を高める，２）効果的なコミュニケーション技法を習得する，３）実践を通じて応用力を養う，を掲げる。技術者，市民，政治家と実際の対話を取り入れ，プレゼンテーションに用いる専門用語の使い方の相違などを学ぶ。

４．２　グループＣ「発信する力・表現する力」

再提出レポートの内容が不充分な学生や，卒業年次になっても表現力が不足している学生がいる。この状況の改善には入学時からの段階的なスキルアップが必要と考える。既存の科目で対応が不十分な部分について，１年次に情報リテラシ技術，２年次に読解力，３年次

には論理的思考と問題解決，それぞれの向上を狙った授業を新設する。

２年次開講の『読解・表現技法』は科学記事を読み要約文を指定文字数内，制限時間内で手書きする，文章の内容をパソコンで図表化する，などに取り組む。互いの要約文を回覧し，どのような文章が優れているのかを学び，自身の課題点を見つける。

４．３　グループＢ「59点の学生をどう引き揚げるかのための新しい授業」

午前中からこのテーマを継続して議論してきた。成績が50点台の学生を引き揚げるには，学生が能動的に課題に取り組むように自信を着けさせるのがよいだろう。本学へ入学した理由が説明でき納得していること，卒業後のキャリアのイメージがあること，自分の実力を客観視できること，などが自信に繋がる重要な要素と思われる。そこで，『室蘭工業大学学』を開講する。この授業は１）本学の魅力を説明できるようになる，２）本学で学ぶことに自信を持てるようになる，３）将来のキャリアパスにつながる意欲を高める，ことを目標に据える。授業では大学でやりたいことを学生同士で話し合い，本学の卒業生を招聘し学生へ語ってもらう。学生はライフプランを考え，自分自身に対する評価を考える。

４．４　グループＡ「学生の主体性を育む授業」

取り上げるのは，工大生に独学できる力を着けて欲しい，ということである。授業中に質問が出ないのは，恥ずかしいからだけか？教科書を読めないのではなく，読もうとする意思がないのではないか？もし，学習内容に興味がないのが理由ならば，反転授業を行えば授業に興味が沸くようになると考えた。内容が伝わりやすい教科書を選定して，従来の授業を反転授業の形式に変える。事業前に指定の範囲を予習して貰う。講義の最初に確認テストを行い，その結果を見て指定した学生に授業を行わせる。学生同士なので，質問もでるだろう。最後に再度確認テストを行う。教員は資料（例えば専門用語をかみ砕いて説明してある）を配付し，授業中は必要に応じて補足説明を行う。この授業により，論理的思考，問題解決力，自己管理力，生涯学習力の向上を期待できる。

４．５　全体を通して

グループDとグループCは期せずしてほぼ同じ問題を取り上げた。後のグループを含めても，工大生のアウトプットの資質向上を取り上げている点は共通している。グループA以外は既存の授業ではフォーカスできないスキルを扱う授業，グループAは既存の授業に即導入できそうなアイデアであった。ディスカッションでは，特徴ある取組の成績評価はどうするか，特にプレゼンテーションなど授業時間中の頑張りでなく，予習・復習を頑張っている学生をどう評価するか，要約対象の文章は日本語に限定されるだろうか，などが議論された。また，留学生の日本語授業では要約を実施していて，800字にまとめたものが後で回覧されるため，留学生は真面目に取り組んでいるという紹介があった。『室蘭工業大学学』はモチベーションが下がってくる頃に実施してはどうかという意見から，モチベーションを高める機会は入学直後を含めて適切な頃合いに複数回必要そうな気がした。

５．閉会式，終了後アンケート他

閉会式では恒例のFDワークショップ賞の表彰式が行われた。これまで，FDワークショップ賞はFDAL委員の話し合いで選んできたが，今回は受講者の皆さんに一番良かったと思われるプレゼンに投票してもらう方式を採用した。投票結果より，グループBにFDワークショップ賞が授与され，記念品が贈呈された。最後に参加者全員で記念撮影をしてワークショップは終了した。

終了後に実施した受講者アンケートでは，ワークショップの難易度，運営，環境，およびグループワークの内容に関して，「適切であった」，「良かった」という意見が大半を占めており，概ね好評であった。一方で，「朝から夕方まで拘束されるのは負担」，「１日で行うにはボリュームが多く時間が足りない」などの意見もあり，スケジュールに関しては再考の余地があることが分かった。

受講者アンケートでは，FDワークショップの開催形式についても意見を伺った。以前のように１泊２日の開催の場合は家庭の事情等から参加不可能になる教員が必ずいる，集中力が続かないだろう，などの否定的な意見と，教員同士が交流できる時間を多く設けられる，環境を変えることによりリフレッシュが期待できる，という肯定的な意見の双方が寄せられた。ただし，メリットとデメリットを併記された教員も多く，受講経験者にとっても１日開催か２日開催かの結論を出すのは悩ましいことがわかった。また，FDワークショップが教員間の交流の場として高く評価されていた。後日行ったFDAL部門の反省会では，教員間交流のために様々な場を設けられないかを話し合った。学内の方々の賛同と参加を得られるような新たな活動を検討してみたい。ところで，教員間の交流の減少への危機感というのは，教員が工大生に思っていることとそっくりである！反省。

グループワーク１は新任教員の方々を意識して設計したが，これは2023年度のFDサロンで新任教員用のFDについて話題になったことに派生する。受講者アンケートの回答からはこの試みに対しそれなりに賛同が得られたと考えている。しかし，例えば，新人教員向けのFD講習を独立させて実施するには相応の準備が必要となる。本学のFDの方針が現在よりいっそう確固としたものに更新されるべきではないか，と思うところである。

最後に，積極的に議論に参加され，ワークショップを盛り上げてくださった受講者の皆様へFDAL部門一同よりあらためてお礼を申し上げる。

報告

生成系AIの大学教育への利用：東京都市大学の試み

FD・AL部門　矢島　由佳

2024年度東京都市大学　全学FD・SDフォーラムが2024年９月13日に開催された。テーマは「生成系AIのポジティブな面から都市大教育への利用を考える」であり，都市大での生成系AIの教育利用の現状や授業等の実践紹介，意見交換会が行われた。国内協定校教職員は午前中の第１部がオンライン参加可能であり，その様子を報告する。

１．都市大における生成AIの教育利用の現状

教育開発機構ICT戦略室より，生成AIに対する都市大の取り組み状況が紹介された。都市大では2023年４月には生成系AI（ChatGPT等）の使用に関する注意事項の第１報が周知され，同年７月にガイドラインの周知，2024年４月には「生成AIの利活用による基本方針」が承認された。2023年当初より，禁止ではなく有用性を認め，仕組みの理解と適切な利用の呼びかけを実施しており，2024年度シラバスからは授業における生成AIの扱いを明記するよう依頼をしている。また教職員へ生成AIと授業，利活用状況に関するアンケートも実施しており，学内の実情把握も進めながら利活用を進める方針とのことである。

２．授業等の実践例紹介

１）外国語共通教育センターより，英語教育における生成AIの利用可能性として「都市大オリジナル英会話学習システム（Merry Chat）」の開発と活用が紹介された。英会話における学生の「人との対話はミスが恥ずかしくて話せない」という心理的ハードルを下げるため，生成AI（ChatGPT4o）を搭載した英会話学習システムが開発され，実際の講義で活用されている。英会話練習ができるだけでなく，CEFRをベースとしたスピーキング力評価も実施可能となっており，学生はAIと会話（20ターン以上）を行い，評価結果がActivity ReportとしてPDF出力することも可能である。活用する教員の考えに基づいてカスタマイズしやすい工夫もなされているという。

２）知能情報工学科より，未活用の教員に向けた「大学講義におけるChatGPTの可能性と課題」が紹介された。ChatGPTの概要から何ができるのか，教師支援ツールとしての可能性について具体的な操作事例を交えた説明がなされた。さらに，課題面としては正確性と信頼性，依存リスクや倫理的課題への取り組みが必要なことなど，教育現場での監督が必要な状況ついても指摘がなされた。

３）都市生活学部インテリア・プランニング研究室より，「『頭は文系・体は理系』っぽい学びのきっかけか？ChatGPT4o画像生成に基づく学生の実験計画策定」として，研究室における利活用の様子が紹介された。卒業論文で使う図の生成AIに描かせてみる事例や，学部低学年学生レポート課題での事例など具体例を示しながら，現状の課題なども報告された。インテリアデザインと実務というレポートでは，テーブルデザインや住宅のプランニングを生成AIにさせてみると，それらしい結果が表示されるものの実際には人が使えない・動けない設計となっている例も示され，必要条件を学生に考えさせるという「ダメな例」としての活用方法も示唆された。

３．意見交換会

最後に意見交換会がなされたが，その際に大学院博士後期課程の学生が所属研究室の他の学生にも生成AIの利活用についてのインタビューを行い，実際の声として教員に話題提供する時間が設けられたことも興味深かった。都市大学では，生成AIの利活用に関する基本方針においてもガイドラインを４つ定めており，学生向け学習利用），学生・教員向け（研究利用），教員向け（教育利用），事務職員向け（業務利用）と学内の多様な立場の人がそれぞれの目的に応じた利活用を推進できる基盤作りが進められている現状が伺えるフォーラムであった。

編集後記

第44号FDだよりをお届けします。本号で報告しているFDワークショップもコロナ禍でのオンライン開催から対面開催に戻って３回目を迎えました。対面での開催のメリットは，普段知り合う機会の少ない他学科，他コースの先生方と直接顔を合わせて話が出来ることにあります。今年度のワークショップでも各チームでの議論が白熱していたようです。FDワークショップを始め，その他のFDAL活動への皆様のご参加，ご協力のほどよろしくお願いします。